

二〇一二年 度

第一回 全統記述模試問題

国語

二〇一二年五月実施

現・古・漢型 一〇〇分
現・古型 一〇〇分
現・現代文型 八〇分

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、問題冊子は25ページである。
- 二、解答用紙は別冊になっている。(解答用紙冊子表紙の注意事項を熟読すること。)
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば、試験監督者に申し出る。
- 四、左表のような「問題選択型」が用意されているので、志望する大学・学部・学科の出題範囲・科目にあわせて、選択型を選んで解答すること。出題範囲にあわない型を選択した場合には、志望校に対する判定が正しく出ないことがあるので注意すること。

	選 択 型	問 題 番 号
1	現代文・古文・漢文型	① ② ③ ④
2	現代文・古文型	① ② ③ ④ ⑤
3	現代文型	① ② ③ ④ ⑤

解答すべき問題数は、現代文・古文・漢文型及び現代文・古文型はいずれも4問、現代文型が3問である。

- 五、試験開始の合図で解答用紙冊子の国語の解答用紙を切り離し、下段の所定欄に**選択型・氏名・在・卒高校名・クラス名・出席番号・受験番号**(受験票の発行を受けている場合のみ)を明確に記入すること。なお、氏名には必ずフリガナも記入のこと。
- 六、解答には、必ず黒色鉛筆を使用し、解答用紙の所定欄に記入すること。解答欄外に記入された解答部分は、採点対象外となる。
- 七、試験終了の合図で右記五、の項目を再度確認すること。

ク ラ ス		受験番号	
出席番号		氏 名	

一 【共通】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 六十点）

まず、近代にいたって科学が発達し、富が蓄積されるとともに事故のもたらす被害も大きくなった。ルソーは都市における富の拡大と奢侈^{しゃし}が、いかにさまざまな薬害^aやシツペイを引き起こすかを語っているし、リスボンの地震がもたらした巨大な災害も、いかに人々の富と比例するものであるかを指摘している。「文明が苦痛と死へと導く多くの新たな扉を開いた」ことを指摘するルソーのこの文章は、人間が原因となった災害や職業病についてのごく早い時期における指摘だった。鉄道が発達していなければ、鉄道の衝突事故も発生しないし、自動車が普及していなければ、これほどの多数の自動車事故の犠牲者も発生しない。リスボンの地震のときに、鉄道と自動車が普及していたならば、その被害はどれほどのものであったか、想像に難くない。

事故^{アクシデント}という語は、何かが落ちるようにして起こるもの（アキデレー）、偶然に発生するものという意味をもっているが、事故^{アクシデント}はもはや偶然^{アウレンデント}のものとは思えなくなってくる。技術の発生とともに事故の規模は拡大するが、事故の発生そのものも偶然ではなく必然的なものとなってくるのである。飛行機事故は必ず発生する。人々にとって問題なのはそれが発生するかどうかではなく、いつどこで発生するか、その飛行機に自分や家族が搭乗しているかどうかにすぎない。

X

技術の発達とともに発生してくる近代の事故にはいくつかの特徴がある。第一の特徴は、それが規則的に発生するものであるということである。「事故⁽²⁾は予測でき、その発生を保証でき、計算できるものである」^b。人々がいかにシンチヨウにふるまっていたところで、事故は一定の比率をもつて発生するのであり、それを防ぐことはできない。仕事場での「事故⁽³⁾の発生率は、他のすべての事情が等しいとすると、毎年一定であり、個人としての労働者の違いに左右されない」のである。第二の特徴は、「集合的な生活の産物である」⁽⁴⁾ことにある。事故は多数の人々が集まって暮らしているところで発生する。

はるかな広野ではなく、ごみごみとした都会のさなかで自動車事故は発生するものである。ルソーも指摘したように、砂漠であれば地震という天災も、いかなる「事故」を引き起こすことはなかっただろう。だから近代の事故は、

Y

を示すものなのである。近代の事故とは、ルソーの語った意味での文明がもたらした「社会的な悪」⁽⁵⁾なのである。

ヴォルテールの『カンディード』では、主人公たちは次々と災厄に直面する。この書物は一八世紀の災難のカタログのようである。主人公たちには、「神様は何か悪意のあるものの手にこの地球を渡してしまった」としか思われたいとしても、これらの災難はどれも嵐や遭難のような自然による災害か、盗難、戦争、リヤクダツ、拷問など、個人の悪意による被害にすぎない。近代の社会悪はこれとはまったく性質の異なるものである。自然の災害ではないし、個人の悪意によるものでもない。⁽⁶⁾「この種の事故の逆説は、それがあつた人の過失から生まれるのではなく、わたしたちの活動がたがいに集合していることによって生まれるということにある」。

ここから「リスク」という奇妙な概念が登場する。一九世紀のフランス語辞典『リトレ』によると、リスクとはもともととは保険会社の用語で、「保険の対象となるそれぞれの建物、動産、船舶、積み荷」を意味していた。それがやがて危険な状態に立ち入ることという意味で使われるようになった。しかし近代にいたっては、それは「⁽⁷⁾一般的な社会的カテゴリー」となり、どのようなものもリスクとなりうるようになったのである。「生⁽⁸⁾も死も、病氣も健康もリスクとなる」のである。生はさまざまな事故の発生する可能性のある時間であり、リスクである。健康もさまざまな病を発生させる可能性のある状態であり、リスクである。「リスクはそこに現前すると同時に不在であり、すべてのもののうちに宿っている」⁽⁹⁾のである。リスクは他者との関係においてはばくたち自身でもある。ばくたちがどれほど健康であり、道徳的な人柄であるとしても、存在することだけで他者にとってリスクをもたらし得るのである。市民の誰もが、健康を失った場合には、他者の介護が必要となる可能性のある存在であり、健康であるあまりに、他者の弱さを無視するような存在として、他者に危険となるかもしれないからである。

このようにリスクが遍在的な可能性となるとともに、保険が重要な役割をはたすようになる。社会的な悪が普遍的なものであるときに、個人では対処できないものとなるからである。保険会社では、保険の対象となるものをリスクと呼んだが、保険の対象が物的な財産だけでなく、人間の生命や健康も含まれるようになるとき、生命や健康がリスクとなるのは不思議ではない。

¹そこにはある種の社会的な正義が含まれるのはたしかである。国民健康保険は、一定の金額の支払いをすべての国民に義務づけることで、経済的な弱者と身体的な弱者というリスクを国民の負担で保障するのである。そこには責任という概念の大きな転換があった。

かつては責任とはまったく個人的な性格のものだった。責任を意味するレスポンサビリティというフランス語の名詞は形容詞レスポンサブルから発生したものであり、この形容詞はスポンサというラテン語から生まれた。スポンサは、「宗教的な性格の約束を厳粛に執り行う」という意味の動詞スポンデーレを語源とする。この語は主として結婚の約束に使われたものであり、スポンサは娘を与えると約束した父親のことを意味するのである。だから娘の夫となる人物にたいして父親が与えた厳粛な約束の行為のもつ性格がレスポンサブルであり、きわめて個人的な約束という意味を含んでいたのである。しかし近代の技術の発展にともなう事故とリスクの大きさのために、このような個人的な責任のとりかたがまったく時代にそぐわないものとなっている。原子力発電所の運転員が制御棒のソウサを間違えて事故を起こしたとしよう。その運転員はどのようにして巨大な被害の「責任」をとることができるだろうか。事故がもたらした生命と財産の被害は、個人が償いうるものではない。

あるいは外国旅行で新型インフルエンザに罹^かって、帰国した後国内で病原菌を広めた人は、どのようにしてそのリスクの責任をとることができるのだろうか。かれもまた被害者の一人なのである。

このようにして事故とリスクのもたらす害を補填する責任があるのは個人ではなく社会全体であるということになった。

それが社会的な正義とみなされるようになったのである。現代の福祉国家の理念は、事故、リスク、責任という概念の転換のうえに^eコウチクされたのである。

(中山元『フリーコー 生権力と統治性』)

(注) 本文中の引用箇所(1)はルソー『人間不平等起源論』、(2)～(9)はフランソワ・エヴァルト『福祉国家』からのものである。

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字で記せ。

問二 空欄

X

Y

つずつ選び、記号で答えよ。

を補うのに最も適当なものを、次の各群の A～オの中からそれぞれ一

- | | | |
|---|-------------|--|
| | X | |
| A | 事故が文明を崩壊させる | |
| I | 事故は文明を促進する | |
| U | 事故と文明は背反する | |
| E | 文明は事故を発明する | |
| O | 文明は事故を隠蔽する | |

- Y
- ア わたしたちの文明化がいかに不徹底であるか
 - イ 地球全体の人口がいかに増え過ぎているか
 - ウ わたしたちが自然からいかに遠ざかっているか
 - エ 地球全体の環境の変化をいかに無視し続けたか
 - オ わたしたちがいかに世界の人々に無頓着であるか

問三 傍線部1「そこにはある種の社会的な正義が含まれるのはたしかである」とあるが、「そこにはある種の社会的な正義が含まれる」とはどういうことか。百字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問四 傍線部2「事故、リスク、責任という概念の転換」とあるが、「事故」の「概念の転換」とはどのような「転換」か。五十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 本文の内容に合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア リスボンの地震の被害は、文明と災害の関係についての思想を生むほど甚大なものだったが、鉄道や自動車が発達していなければ、かなり抑えられたはずである。

イ 近代的なリスク概念は、安全な状態自体を危険を生み出しまうものとして捉える点で、ある種の逆説性をはらんだものと言える。

ウ 事故発生による被害の大きさをできるだけ正確に想定して、事故後の立て直しを迅速に行えるように配慮することが、近代福祉国家の担うべき役割である。

エ 責任を意味するフランス語が宗教的なものから個人的なものへと変化した背景には、近代の技術の発展が深く関係している。

オ 近代においては、すべての人間がそれぞれリスクを背負わざるをえないため、どのようにしたらそのリスクを安全なものに変えられるかを考える自己責任が生じた。

カ 近代において科学技術が発達するとともに大規模化した事故は、もはや善悪というレベルでは捉えられなくなつた。

【共通】

次の文章は、筆者がある時期から繰り返し見る夢の内容を記したノートをもとに書かれたものである。これを読んで、後の問に答えよ。（配点 四十点）

わたしは十四歳のとき初めてモンテーニユの『エッセー』に触れ、ある達観のもとにみずからを虚心に語るといふ行為がそのまま書きもののジャンルとして成立するという事実に眼を見開かせられた。稚拙な手つきで『エッセー』についての感想を纏め、中学校のクラブ活動で刊行している謄写版の雑誌に発表したことがあった。それ以来、機会あるたびにこの書物にはお世話になっているという気持ちを抱いている。

だがモンテーニユの生きた十六世紀とわたしが生きている二十一世紀とは、自己省察において何かが決定的に異なっていた。それは端的にいうならば歴史の発見であり、無意識という観念の進展である。ここでは後者についてだけ考えることにしよう。

フロイトが最初に提唱し、ユングが捻転させた無意識という考えは、人間がもはや X ではないことを証し立ててみせた。「我思う、故に我あり」という西洋近代が古典的に踏襲してきた理性的認識の原理に罅が走り、人間は意識の下底にあつて意識されざる巨大な心的領域によって揺り動かされ、衝き動かされ、ときに予期もしない行動に走るという現象が、理論的に分析されるようになった。夢とはそのもつとも日常的な現われであり、それを丁寧に見つめることによって人は、意識の次元では到達しえなかった自己認識に接近することができる。わたしを根底において動かしているものはわたしではない。むしろわたしが否認してやまない、わたしの無意識である。もし『コリント人への書簡』からの引用が許されるならば、次のようにいい直すこともできるだろう。すなわち、わたしが生きているのではない。わたしの内側で、それが生きているのだと。

モンテニウの生きた時代には、人はまだ無意識という觀念に気付いていなかった。人間をよき行動に、あるいは誤った行動に駆り立てるのは人格的意識であり、彼が携えている道徳にすぎなかった。わたしはこの時代を、ある種のノスタルジアのもとに眺めている。だが今日では人は、自分の想念を超えた衝動によって行動し、しばしば恐ろしい破滅を招き寄せてしまうのだ。わたしにとって自分の無意識とは他者そのものであり、それに直面することは地下室の奥の白骨化した死体に向かい合うことと同様に脅威に満ちたことである。にもかかわらず、わたしはこの無意識が差し出しているメッセージを謙虚に聞き留めなければ、心的な均衡を喪失してはかない結末を迎えることだろう。わたしがこの書物の中に夢をめぐる一章を設け、自分をたびたび襲うことになる夢の記述に耽^{ふけ}ったのはそのためである。いや、夢がわたしを襲ったのではない。¹わたしがそれらの夢を必要としていたのだ。

ここまで書いてきてわたしは、²自分がある巨大な錯誤の最中にあるのではないかという思いから自由になることができないことに気付いてしまう。わたしは夢について語ってきたつもりだが、それは実際に体験した夢をどこまで反映しているのだろうかという疑問が、わたしを捉^{とら}えて離さないのだ。

夢と夢をめぐる言葉とは違う。夢は一瞬のうちに霧散してしまう唯一性の体験であって、そもそもが他人に伝達不可能なものである。夢が荒唐無稽に見えるのは、そこに検閲が働いているからだ。フロイトは論じている。だがこの検閲は、直接体験が言語化される時点でまたしてもなされてしまうのではないだろうか。わたしがかつてノートに書き記した段階で、それはすでに細かな枝葉を失い、凡庸な物語の秩序のもとに再編成されていたはずである。どうして夢のある部分は記憶しているのに、他の部分は消滅してしまうのかという問いは、精神分析が隠蔽記憶の存在を導きだす縁^{よすが}となった。長い歳月が経過し、今こうして論じている間にもさらなる単純化が進行し、結果としてわたしが体験した夢の生々しさからはほど遠い言葉しか、わたしは書き記すことができないでいる。夢はひとたび生じた以上、それを反復的に語ることはで

きず、どうしてもそこにズレが生じてしまわざるをえない。これはより哲学的に捉えなおしてみるならば、人は事物なり事件の起源をめぐって、けっして万全の遡行をなしえないということでもある。

わたしは二十歳代の前半に丸山圭三郎からソシユール言語学の手解きを受けたとき、言語の根底にある恣意性という問題に大きく躰いた体験をもっている。ある概念に対しある音声に対応して単語なるものが成立するわけだが、そもそも概念と音声の間には何ら必然的な関係はなく、両者はたまたま結合したというだけの話にすぎない。とはいえひとたび結合してしまふとその紐帯を解くことは不可能であり、

Y

人間は、両者が表裏一体の必然的な関係を生きていると信じなければ生きていくことができない。だが原理的にはそれらの間には恣意性が横たわっている。

わたしはこの恣意性の魔に深く囚われてしまった。たとえばある女性がある男性と恋仲になったという事件そのものは、恣意的なことである。だがひとたび結合してしまった以上、彼らは生まれ落ちた時から一緒だったように仲睦まじく見え、本人たちもそれを固く信じている。ある人間がたまたまある民族とある国家の下に生を享けたとして、それは恣意的な事件である。だがひとたび生まれてしまった以上、その民族も国家も彼にとって必然としてしか思えないとすれば、この恣意性はどう解決されればいいのか。大学時代のわたしは、あらゆる現象を原理的な恣意性というフィルターを通してしか眺めることができなかった。

それから三十年以上の歳月が経過してわたしを捉えて離さないのは、事後性という問題である。こう書いてみるとひどく抽象的に聞こえるが、これは先ほどの夢とその夢を語る言葉の間のズレを思い出していただけに理解していただけることだと思う。われわれの認識と言語化は、なぜいつでも事件が生じた後にしかなされないのか。後になって語るというだけで、それはまったく別の物に転じてしまうのではないか。こうした苛立ちにひとたび捉えられてしまうと、日常生活におけるありとあらゆる言葉や物語が色濃く事後性の徴候を帯びていることが気になって仕方がなくなってくる。

たとえば今日の社会では巨大な惨事を偶然にも目撃してしまった人物は、警察や病院への報告に始まり、メディアへの対応、そして知人友人へのお喋りにいたるまで、何十回、何百回となく、同じ惨事について物語ることを要求されることになる。そのたびごとに彼の口調は滑らかになり、語る行為は洗練されてソツのないものへと変化してゆく。だが同時にそれは、原初に遭遇した、とうてい言語化できない体験が、しだいに物語の枠組みをあてがわれて馴致され、誰の耳にも聞きやすい平板な語りへと低落してゆくことであるといってもよい。人間を直接体験から疎外しているのは、すべてこの事後性に基づく表象である。だがそれを抜きにしていかなる言葉が可能かといえば、苦痛のさなかにある人間の呻き声と呼びしか残らないだろう。夢についてばかりか、認識一般についても、われわれは事後性を回避してそれを語ることができないのだ。

(四方田犬彦「夢が告げ知らせるところ」)

問一 空欄

X

Y

を補うのに最も適当なものを、次の各群のA～Oの中からそれぞれ一

つずつ選び、記号で答えよ。

- | | |
|--|----------|
| <p>ア 理論的に明瞭な図像を結べない曖昧な存在</p> <p>イ 自らを完成品へと仕上げていく克己的な存在</p> <p>ウ 衝動という怪物を宿した野蛮な存在</p> <p>エ 想念を超えた闇夜に操られる不安定な存在</p> <p>オ 昼間の意識にのみ制御される一枚板の存在</p> | <p>X</p> |
|--|----------|

- Y
- ア 概念と音声の恣意性に無関心だった
 - イ 言語の内側へと生まれ落ちてきた
 - ウ 言語の原理的な恣意性に魅せられた
 - エ 成長する中で様々な概念を習得してきた
 - オ 概念というものと運命をともにしてきた

問二 傍線部1「わたしがそれらの夢を必要としていたのだ」とあるが、筆者が「夢を必要としていた」のはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 西洋近代が踏襲してきた理性的認識の原理が限界に達し、それまで顧みられることのなかった無意識とその現れである夢を通じて人間を捉え直すことが重要だと考えたから。

イ これまで意識の次元では到達不能だった自己と向き合い、そのあるがままの姿を正確に記述し理解するためには、無意識の反映としての夢を見つめるべきだと考えたから。

ウ 自分を襲うものとして夢を捉えることは、夢によって翻弄され人生の破滅を迎える自分を肯うこと^{うべな}になるので、逆に自分が夢を追求しそこに望ましい意味を見出すべきだと考えたから。

エ 無意識は人を衝動的な行動に駆り立てるが、夢を詳細に書き記すという行為を意識的に行うことで無意識の暴走を抑制し、人生のむなしい結末を避けられると考えたから。

オ 自分の想念を超えた無意識が破滅さえ招きかねない事態を回避するためには、無意識の日常的な発現だとされる夢の意味するところを真摯^{しんし}に受け止めるべきだと考えたから。

問三 傍線部2「自分がある巨大な錯誤の最中にあるのではないか」とあるが、ここでいう「錯誤」とはどのようなことか。「夢」に即して九十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問四 本文の内容に合致するものを、次のア〜カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア ある概念とある音声が結合したところに単語が成立し必然的な関係が築かれるのは、言語の根底にある恣意性を人間が固く信じてきたからである。

イ 人間が苦痛のさなかに口にする呻き声や叫びを誠実に受け止めることこそ、言語の事後性という絶望的な状況を打開する手がかりになるはずである。

ウ 筆者にとって、原理的な恣意性という考え方も事後性という問題も、言語を通じて世界を捉えるしかない人間の認識のあり方について考えさせる契機となった。

エ モンテーニュの生きた時代には、人間の人格的意識や社会生活の中で身につけた道徳が、その人間の行動を善くも悪くも導くものだと考えられていた。

オ フロイトが提唱した無意識という概念は、意識で捉えられない部分が人間にあることを示し、西洋近代的な認識の原理を徹底化することになった。

カ 夢についてだけでなく認識一般についても、他者に対して繰り返し語るといふ行為がもとの体験との間にズレを生じさせてしまうことになる。

国語の問題は次のページに続く。

三

現・古・漢型

現・古型

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 五十点)

父太政大臣(殿)の賀茂神社参詣の御供をしていた男君は、その途中で見かけた荒廃した邸に住む女と一夜の逢瀬(おうせ)を持ったが、その後、親の監視が厳しく逢うことはかなわなかった。十数年後、狩りに入った北山で男君は一人の少年(子)に出会う。少年が自分の子であると気づいた男君は、いったん都に帰った後、再び北山の奥の杉の木の洞穴(ほらあな)に住む母子のもとへと向かう。

かの木のもとにおはし着きて、しはぶき給へば、子出で来て見て、「さきにおはしたりし人こそおはしたれ」と言へば、「いでや、あなはづかし。何人(なにびと)におはすらむ。あやしくて、またさへ見え奉り給ふこそ」と言へど、「かくふりはへ給へるに、いかで隠れむ」とて、出でたり。「所入り給ひて、「汝(まじ)はえ知らじ。母君に對面せむ」とのたまへば、「さなむ」と母に語れば、「やがて失せぬる人にてこそあらましか。何しにか知らせ奉る」と言へど、かひなし。

入りおはして、「さきにも聞こえむと思ひしかど、まだきに聞こえたらば、かうもぞあらがひ給ふとてなむ。我ぞ賀茂詣での御供にて、見奉りし。その時は、聞こえしやうに、求め騒がれけるに、帰り参りたりしかば、いみじうむづかり給ひて、おはしましし限り、片時も御身をはなち給はず、『隠れ心ある人なり。逃がすな』とて、いささかも立ち退けば、人をつけてまもらせ給ひしかばなむ、いかならむ世に参り来むと思はぬ時なりしかど、みづからならでは、おはせし所見たる人もなくて、え聞こえざりしに、殿隠れ給ひて後、住み給ひし所を見しかど、いとど野のやうになりて、尋ね聞こゆべき方もなかりしかば、行方なく、おぼつかなきを、としごろ思ひ嘆きつるは。さは、かうておはしけるなりけり」と泣く泣くのためへば、はづかしさいはむかたなけれど、むげに聞こえざらむも若々しければ、この苔の簾のもとに寄りて、「こ

よなきほどの事なれば、かくのたまはするもおぼつかなながら、夢のやうになむ、⁶さもやありけむとばかりおぼえ侍る。^(注4)あやしかりしほどに、⁷かかる人さへ出で来にしかば、いとどところせく、『これを人に見せざらむ住家^{8すみか}もがな』と思ひ給へしほどに、かく世離れ果てて侍る。昔をだに、たぐひなき身と思ひ給へしに、またかかることも侍りけり』と泣く泣く言へば、『何か、そは。世の常のさまにて、きよげなる住まひし給はむを見ましかば、昔の心ざしは失はぬものから、心憂からまし。世を思^{おも}ひ離れにけると、この御住家になむ、いとど深くは思ひつる。とまれかうまれ、御迎へにとてなむ参り来つる。こにも劣らず、人目まれなる所をし置きたり。そこに、おぼつかなからずを、聞こえはるけむ』とのたまへば、女、「げにいとよきことに侍れど、今は限りに思ひ入りにし山路を、今さらに、思ひ給へ歸らむ空もはづかしう侍るべき。ただ、かの人ばかりを、ありけりと思しおかれなむを、うしろやすく思ひ給へて、ひたみちなる行ひに思ひなりなむこそ、うれしからめ』と動⁹きげもなし。

〔宇津保物語〕

(注) 1 またさへ見え奉り給ふこそ——またおいでになるとはどうしたことだろう、の意。

2 やがて失せぬ人にてこそあらましか——自分はそのままこの世に亡き人ということになっていたかった、ということ。

3 聞こえしやう——逢瀬を持った時に、男君が女に「自分は親の監視が厳しい」と話したことをさす。

4 あやしかりしほどに——ほんの一夜だけの逢瀬を不思議に思っていたうちに、の意。

問一 傍線部1「かくふりはへ給へるに、いかで隠れむ」とあるが、少年は、どういうことを言っているのか。わかりやすく説明せよ。

問二 傍線部2「かうもぞあらがひ給ふ」、6「さもやありけむとばかりおぼえ侍る」の現代語訳として最も適当なものを、次の各群のアーオの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- 2
- ア こんなに驚きなさっては大変だ
イ こうして反対なさるならともかく
ウ その時に抵抗してください
エ このように否定なさるのも困る
オ どうか反論させてください

- 6
- ア そうであるかもしれないとばかりお思いになる
イ そうであるにちがいないとばかり思い申しあげる
ウ そうでもよいとばかり思っておられます
エ そうであってほしいとばかり思っていらいっしゃる
オ そうでもあったかどうかとばかり思われます

問三 傍線部3「え聞こえざりし」、5「としごろ」、8「住家もがな」を現代語に訳せ。

問四 傍線部4「殿隠れ給ひ」と反対の状況を示す単語を、本文中から五字以内（句読点等は含まない）で抜き出して記せ。

問五 傍線部7「かかる人さへ出で来にしかば、いとどころせく」とは、どういうことを言っているのか。その説明と

して最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 子どもができて、しだいに将来への期待が持てるようになったということ。

イ 子どもも生まれて、ますます気づまりな思いをするようになったということ。

ウ 男君が突然に現れて、とてもきまりの悪い思いをしたということ。

エ 男君の親に邪魔までされて、いっそう身の置き所がなかったということ。

オ 男君が今ごろになって現れて、ほんとうに腹立たしかったということ。

問六 傍線部9「動きげもなし」は、女の様子を表しているが、

(1) これは男君のどのような発言に対する様子か。発言の内容として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 今後のことが気がかりなので、子どもだけは引き取りたい。

イ ここに立派な住まいを建てるので、親子水入らずで暮らそう。

ウ 昔と変わらぬ愛情があるのなら、都へ会いに来てほしい。

エ 女がひっそりと暮らせる所を用意したので、都に迎えたい。

オ この木の洞穴で一緒に、今以上に深く仏道に専心しよう。

(2) 女は、この時の気持ちをどのように述べているか。六十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

四

現・古・漢型

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合で、返り点・送り仮名を省いたところがある。)(配点 五十点)

神文時、慶曆間、淮南有王倫者、嘯聚其党、頗擾郡县。承平日久、守臣或有委城而去者。事定、朝廷議罪。鄭公在枢密、凡棄城、請論如法。范文正參預大政、争之以為不可。今江淮郡县、徒有名耳。城壁非如辺塞、難以責城守。神文叡德、寛仁、故棄城得減死。鄭公忿謂文正曰、「六丈欲作仏耶。」范曰、「主上富於春秋、吾輩輔導^{ナサケ}当^{クニ}以德^{デス}。若使人主輕於殺人、則吾輩亦將^ト以^ニ不容^{ラント}矣。」鄭公歎服^ス。

(王得臣『塵史』)

(注) ○神文——北宋の第四代皇帝、仁宗のこと。

○慶曆——北宋の年号(一〇四一—一〇四八)。

○淮南——地名。

○嘯聚——呼び集める。

○承平——太平であること。

- 守臣——地方の長官。
- 鄭公——北宋の政治家、富弼ふひつのこと。
- 樞密——樞密院。軍政を司る中央官庁。当時、富弼は副長官の地位にあった。
- 范文正——北宋の政治家、范仲淹はんちゅうえんのこと。
- 参預大政——副宰相の地位にある。
- 江淮——地名。
- 城守——町を守ることに。
- 六丈——范仲淹のこと。
- 富於春秋——年が若いこと。

問一 傍線部イ「頗」、ロ「若」の読みを、送り仮名も含めて平仮名ばかりで答えよ。

問二 傍線部 a「定」、b「名」と同じ意味を表す熟語として最も適当なものを、次の各群のア～オの中から、それぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

a 「定」					b 「名」				
ア	決定	イ	裁定	ウ	認定	エ	判定	オ	平定
ア	著名	イ	名目	ウ	功名	エ	名誉	オ	実名

問三 傍線部1「凡棄城、請論如法」を現代語訳せよ。

問四 傍線部2「城壁非如辺塞」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 江淮地方の町を取り囲む城壁は辺境の塞よりも高く築かれている。

イ 江淮地方の町を取り囲む城壁は辺境の塞よりも貧弱なものである。

ウ 江淮地方の町を取り囲む城壁は辺境の塞よりも堅固に作られている。

エ 江淮地方の町を取り囲む城壁は辺境の塞よりも昔に築かれたものである。

オ 江淮地方の町を取り囲む城壁は辺境の塞よりも短期間で築かれたものである。

問五 傍線部3「難以責城守」を書き下し文に改めよ。

問六 傍線部4「使人主輕於殺人」は「人主をして人を殺すを軽んぜしめば」と読む。この読み方に従って、解答欄の原文に返り点を施せ。（送り仮名は不要。）

問七 傍線部5「鄭公歎服」とあるが、「鄭公」は「范文正（仲淹）」のどのような考え方を立派だとして感服したのか。七十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

五

現・古型

【現代文型】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

二〇世紀は、「科学の時代」であると同時に、その一方では、資本の時代でもあり、市場原理に優先権を与えた時代でもあった。急速に発達した資本主義は、子どもを消費者として発見し、彼らもまた、市場原理に巻き込まれて、時には市場の動向を左右したりもする。一時、市井^aに賑々^bしく話題を提供した「少子化」と「景気」の関連は、前世紀の作り出したこうした関係に起因している。「子ども」の減少は、子ども向け産業を壊滅させ、子ども市場を衰退に追い込み兼ねないのだ。

わが国の場合、一九〇九（明治四二）年に三越百貨店で開催された「児童博覧会」は、当時の新興市場によって子どもがターゲットに選ばれていく動きの象徴である。江戸期において手広く呉服物を商^{あきな}っていた商店群が、欧米のデパート・ストアに倣^{なま}って「百貨店」と呼称を改め、従来と異なる多種多様の商品を扱う大規模商店へと転換を遂げるのがこの時代である。そして、子どもをターゲットにした博覧会の試みは、他に先駆けて三越が選り取った経営戦略の一つであった。何しろ、それは、呉服屋に足を運ぶ従来の顧客層を超えて、「子ども」という新たな顧客を掘り起こす試みであり、また、市場が時代の動きを先取りしリードしていくという、今後を見通した経営者たちの卓見でもあったのだ。

「児童博覧会」の企画と構成に参画したのは、著名な児童文学者の巖谷小波^{いわやこなみ}を始めとして、人類学者・民俗学者・画家・詩人など、いずれも各界の錚々^{そうそう}たるメンバーであり、世に知られた人々であった。彼らは、子ども対象の博覧会というこのイベントに参加するに当たって、「児童博覧会はいくまでも児童本位のものでなければならず、児童の心身に悪い影響を与えてはならない」と良識ある見解を表明し、主催者側の三越も一応はその意見を尊重する態度を見せていた。言うまでもなく、新興勢力たるデパートが必要とするのは、「消費者としての子ども」であり、その狙いは、子ども向け商品

の開発と販売の促進であり、また、親たちの購買欲を刺激して商品購入へと誘導することである。A、有識者の発言がないがしるにはされなかったところに、この時代の空気を感じ取ることが出来よう。

の論理は、「子ども」を巻き込み、彼らに触手を伸ばしてはいたが、しかし、商品の開発や販売にせよ、あるいは広報戦略にせよ、いずれの場合も、「子どものために役立つ」という教育文化性を付加価値とすることを忘れなかったのである。

二〇世紀に入って、わが国にも都市中産階級が成立すると、子ども向け市場は、子どものために快適な環境を整えることに熱心なこの階級を標的として、子どもに快適という以上に母親の教育文化観を満足させるような子ども向け商品の開発に意欲的となり、それをめぐって活発な商戦が展開される。「勉学のための子ども部屋」や、そこに置かれる「机・椅子等の家具類」、さらには「筆記用具」や「参考図書」などがそれであるが、いずれも「成績が向上する」「勉強好きの習慣がつく」などのキャッチフレーズに彩られて市場を闊歩した。C それら新商品の生産を手掛けるべく、小規模ながら「子ども産業」が始動し始めるのは当然であろう。

そして、これら子ども用品は、直接の使用者である子どもと、購入者である親との両者の希望に応えねばならず、製品の複眼的な魅力を要求されることになる。なぜなら、使用者は子どもに他ならないのだが、そのための資金の提供者、すなわち購入者は親たちであるのだから。「製品の魅力と効用」が、複眼的に選択され整備されるといふこの特色は、以後、子ども産業の特色として斯界を支えることになる。

二〇世紀前半、つまり、わが国の明治末期から大正期にかけて、華々しく展開され、「童心主義が花開いた」と評された児童文学・文化の運動も、1 文化の子ども向け産業の興隆というこの動きの路線で捉えることが出来る。この動きは、大正期に入るとひととき純化の度合いを高めて、参加協力した作家たちの意向も反映し、前代のそれにまして芸術性が強調された。加えて、大正という時代の空気を反映して、優れてロマンに満ちたものであった。

一九一八（大正七）年、「純麗なる童話と童謡」の創作と発表を目指して始動した『赤い鳥』運動も、こうした時代の

動きを代表する典型例の一つであろう。鈴木三重吉にリードされたこの運動は、近現代の児童文学が語られる場合に限らず、子ども観や子どもをめぐる時代思潮が語られる場合も、必ず言及される重要トピックの一つである。送り出された作品の優劣は別として、運動の発生とその展開過程には、時代精神が脈々と波打っているからだと言われるのである。

しかし、当然のことながら、大正期の児童文学・文化運動も、子どもを消費者と見た市場主義と無縁ではなかった。小波の活動が、「博文館」や「三越」と組んで展開されたのがその何よりの証しであろう。三重吉の芸術的意志にリードされたとされる『赤い鳥』運動も、主導者や参加者の意図は別として、市場を意図した点では同様と言い得る。確かに、賛同した同人の会費によって運営されたこの活動は、そのゆえに、市井の出版社と手を組むこともなく、その資本と営業戦略に依存するものでもなかった。しかし、後に、同人たちの願いも空しく、購入者の減少に伴い増加する赤字を背負い兼ね、止むなく廃刊に至った経緯がそれを証明している。児童文化運動と言えども、関係者たちの情熱とロマンだけを頼りに、手弁当的に遂行されることは不可能だったということであろう。

子どもたちは、時代の市場の前に新種の「消費者」として発見された。このことの意味は、決して小さくない。それに伴って発生した「教育産業」や「受験産業」とのかかわりもあって、現在では教育費が異常なまでの高騰を見せ、それが、親たちの嘆きや苦しみの原因とされている。

D、高騰する教育費は格差社会の象徴とすら見なされ、社会の現状を告発する際の有力因ともされているではないか。その遠因が、こうした形でこの時期に培われていたと考えるなら、子どもを消費者化し、彼らを市場戦略に巻き込んだこの動きは、子どもの現状を語ろうとする場合に、避けることの出来ない関門と位置付けるべきかも知れない。

（本田和子『それでも子どもは減っていく』）

問一 傍線部 a i e の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 空欄

A

D

を補うのに最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

ア すなわち イ さらに ウ しかし エ したがって

問三 傍線部1「文化的孩子も向け産業」とあるが、この「産業」の特徴はどのようなものか。六十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問四 傍線部2「『赤い鳥』運動」とあるが、「『赤い鳥』運動」とはどのようなものであったと筆者は考えているか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 子どものために役立つことを最優先の目標にしながらも、新しい商品をたえず探し出すという市場動向に配慮しつつ、新鮮でロマンあふれる作品を世に送りだそうとした。

イ 子ども向け産業の隆盛という時代の動向のなかで、子どもを対象としながらも主導者や参加者たちは自らの芸術性の追究を意図して、市場戦略がおろそかになってしまった。

ウ 子どものために役立つことを最優先にしながらも、多くの赤字を出してしまい、市場性を意識せざるを得なくなり、より多くの発行部数を得ようとした。

エ 主導者や参加者の芸術的意志や情熱やロマンにリードされ、利益を度外視し、既存の出版社と手を組むこともなく、芸術性の高い作品を厳選して掲載しようとした。

オ 時代の空気を反映してひととき純度の高い芸術性を満足させるべく、各界の第一人者を招いて学術的レベルの高い作品を発表しようとした。

問五 本文の内容に合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 二〇世紀に発達した資本主義は、子どもを消費者として発見したが、急速に進んだ少子化の影響でその経営戦略は必ずしも成功したとは言えない。

イ 三越百貨店で開催された「児童博覧会」は他に先駆けて三越が選り取った経営戦略の一つであり、それは欧米のデパートメント・ストアの動きに倣ったものであった。

ウ 現在では「教育産業」や「受験産業」などの影響もあり教育費の過度な高騰が見られるが、その原因は二〇世紀前半の社会状況にまでさかのぼることができる。

エ 巖谷小波を始めとする文化人たちの考え方は資本の論理とは相容れないものであったため、新興勢力たるデパートはその受け入れを拒否した。

オ 鈴木三重吉による『赤い鳥』運動は、収録作品群の優秀さにより、近現代の子どもを取り巻く時代思潮が語られる場合には頻繁に言及されるトピックとなっている。

問六 波線部「鈴木三重吉」は夏目漱石の門下として知られるが、夏目漱石の作品を、次のア～キの中から三つ選び、記号で答えよ。

ア 山椒大夫 イ 虞美人草 ウ 河童 エ 行人

オ 斜陽 カ 青年 キ 明暗

